

## 萌芽的研究会「学術とことばシンポジウム」実施報告書

### 1、実施概要

・開催日時 2016年1月22日(金)13時より17時(会場12時半)

・会場 メルパルク東京 瑞雲

・当日スケジュール

①基調講演 「日本語の“タタミゼ”力」

鈴木 孝夫 慶應義塾大学名誉教授 言語文化学

②講演Ⅰ 「日本語による科学」

松尾 義之 白日社編集長 科学ジャーナリスト

③講演Ⅱ 「近代における日本語の革新 — 訳語、漢語、そして和語—」

田中 牧郎 明治大学教授 言語学

④講演Ⅲ 「フィールドから拾う現代の『日本語』とその特質」

出口 正之 総合研究大学院大学・国立民族学博物館教授 言政学

⑤パネルディスカッション 【司会】 永山 國昭 総合研究大学院大学理事

### 2、参加者一覧

鈴木 孝夫 慶應義塾大学名誉教授 言語文化学

松尾 義之 白日社編集長 科学ジャーナリスト

田中 牧郎 明治大学教授 言語学

出口 正之 総合研究大学院大学・国立民族学博物館教授 言政学

牛村 圭 国際日本研究専攻 教授

菊澤 律子 比較文化学 准教授

島谷 健一郎 統計科学 准教授

両角 祐一 加速器科学専攻 講師

田村 克己 理事

永山 國昭 理事

平田 光司 学融合推進センター長

七田 麻美子 学融合推進センター 特任准教授

塚原 直樹 学融合推進センター 助教

小松 睦美 学融合推進センター 助教

菊地 浩平 学融合推進センター 助教

新海 拓郎 生命共生体進化学専攻

田村 美由紀 国際日本研究専攻

古沢 ゆりあ 比較文化学専攻

増田 斎 国際日本研究専攻

山村 奨	国際日本研究専攻
秋山 庵然	日本体育大学 保健医療学部
井上 逸兵	慶應大学文学部教授
今別府 悟	日産自動車株式会社
宇津木 光代	一般
風見 岳快	都立足立高等学校 定時制課程
川崎 晶子	立教大学異文化コミュニケーション学部
斎藤 淳子	一般
菅 直樹	駒場東邦中学・高校 英語教師
辻村 厚	大修館書店 編集部
林 香月	Nature Publishing Group
原田 由美子	大修館書店 編集第2部
檜枝 光太郎	立教大学
野水 昭彦	情報・システム研究機構 (ROIS)総合企画本部 URA ステーション・シニア URA 女性研究者活動支援室長

## 2、議論の概要

### ①基調講演

言語文化学の鈴木先生による基調講演では、日本語の特性として多様性を受け入れる受容力を挙げ、近代以降の世界的な状況、特に近年の西洋的な価値観の枠組みに収まり切らない複雑化した状況の中で、日本語の持つ柔軟性を活かしていくことについて示唆が行われました。

### ②講演 1

科学ジャーナリストの松尾氏の講演では、日本人科学者の活躍と、その基盤として思考を支える日本語による学術の営みを考察し、科学と言葉の問題、日本語による科学の可能性について報告がなされました。

### ③講演 2

言語学の田中先生の講演では、近代、特に明治初期の漢語の受容と展開さらに定着の様相を日本語コーパスを使って分析し、さらに学術語の発生と定着の様子を同様の手法で確認されました。その結果、漢語の定着には和語との組み合わせによる使用が大きな働きをしていること、現代における学術語・専門用語の使用状況に漢語を除く外来語が大きな割合を占めていることが分かると報告されました。

### ④講演 3

言政学の出口先生の講演では、現在の日本語、特に書き言葉の多様性の調査の報告がなされました。一般的に認識されている「漢字仮名交じり文」という定義よりも、さらに多様な要素を含む表現が行われていること、それらに習熟した世代が台頭していること、そのため、

その多様性を制限せずに使うことが持つ可能性が考察されました。どんな言語を用いるか、それらを組み合わせて表現をするかは、誰に何を伝えたいかという意図を表すものになることであることも示唆されました。

#### ⑤ パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、サブタイトルにも掲げた「日本語創造は可能か」を中心に、日本語で学術すること、学術活動における言葉の問題について、各講演の内容に基づき議論がなされました。会場からの質問も受け付け、日本語の可能性、学術の可能性についても議論が広がり、今後こうした考察を続けていくことを確認して終了しました。

### 3、今後の展望

今回のシンポジウムを踏まえて、今後は以下の展開を予定しております。

①次年度以降、ことばの学術活動における影響を考察するために、特に学際研究を阻害する要素としての「言語：言語障壁」を研究するプロジェクトを立ち上げ、学融合推進センターの公募型研究に応募する。

②本学の学生、特に留学生を中心として、「母語以外での教育・博論研究・今後のキャリア」を考える自身の研究者としての立ち位置を相対化するキャリア教育を目的としたワークショップ型授業を学融合レクチャー（単位なし）を実施する。

以上